

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 4 号について
平成 2 3 年度病害虫発生予報第 4 号を発表したので送付します。

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 4 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	本文の記 載ページ
普通期水稲	1 葉いもち	やや多	2
	2 紋枯病	並	2
	3 ツマグロヨコバイ	並	2
	4 セジロウンカ	やや少	2
	5 トビイロウンカ	並	2
	6 ヒメトビウンカ	やや多	3
	7 コブノメイガ	やや少	3
野菜類全般	1 アブラムシ類	並	3
	2 ハスモンヨトウ等のチョウ目（鱗翅目）害虫	並	3
果樹全般	1 果樹カメムシ類	やや多	3
カンキツ (露地栽培)	1 かいよう病	やや多	4
	2 黒点病	やや多	4
	3 ミカンハダニ	やや多	4
	4 チャノキイロアザミウマ	並	5
茶	1 炭疽病	やや多	5
	2 輪斑病	並	5
	3 チャノコカクモンハマキ	やや多	5
	4 チャハマキ	並	6
	5 チャノホソガ	やや多	6
	6 カンザワハダニ	並	7
	7 チャノキイロアザミウマ	やや多	7
	8 チャノミドリヒメヨコバイ	並	7
	9 クワシロカイガラムシ	やや少	7

は防除情報を発表

作物の生育状況（7月中旬）

普通期水稲は分けつ期、うんしゅうみかんは果実肥大期、茶は三番茶の摘採前～摘採始めであった。

向こう1か月の気象予報

天気は、平年に比べ晴れの日が少なく、気温は平年並の確率40%、降水量は平年並または多い確率ともに40%、日照時間は平年並または少ない確率ともに40%と予想されている。
(1か月予報 鹿児島地方気象台7月22日発表)

発生予報の根拠および防除対策

普通期水稲

1 葉いもち（やや多）

平成23年度病害虫防除情報第5号（6月16日発表）参照

[予報の根拠]

- (1) 7月下旬の巡回調査における発生面積率37.5%（平年36.9%）は平年並、発病株率13.0%（平年13.6%）は平年よりやや多である。
- (2) 向こう1か月の天気は、平年比べ晴れの日が少なく、気温は平年並の確率40%、降水量は平年並または多い確率ともに40%、日照時間は平年並または少ない確率ともに40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 中山間地域の一部で、発生の多いほ場があるので注意する。
- (2) 箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意する。
- (3) 穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、粉剤または液剤による穂ばらみ後期と穂揃期の防除を徹底する。

2 紋枯病（並）

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の巡回調査では発生未確認である。
（平年：発生面積率0.5%、発病株率0.0%）
- (2) 向こう1か月の天気は、平年比べ晴れの日が少なく、気温は平年並の確率40%、降水量は平年並または多い確率ともに40%、日照時間は平年並または少ない確率ともに40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) イネの抵抗性が低下する幼穂形成期から穂ばらみ期にかけて上位葉鞘に進展するので、防除は穂ばらみ期に行い、その後も上位葉鞘への進展が続く場合は2回目の防除を実施する。
- (2) 株が成長して風通しが悪くなると急激に病勢が進展するので、前年多発したほ場では十分注意する。

3 ツマグロヨコバイ（並）

- (1) 7月中旬の発生面積率30.0%（平年32.8%）は平年並、20回すくい取り虫数1.9頭（平年1.2頭）は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 萎縮病、黄萎病を媒介するので注意する。

4 セジロウンカ（やや少）

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積率50.0%（平年75.6%）は平年よりやや少、20回すくい取り虫数1.4頭（平年33.1頭）は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 幼穂形成期頃に多発生すると、吸汁による生育抑制、下位茎葉の黄変枯死、出穂の遅れが生じるので、発生状況を見て若齢幼虫期に防除する。
- (2) イネ南方黒すじ萎縮病(仮称)を媒介するので注意する。

5 トビイロウンカ（並）

平成23年度病害虫防除情報第7号（7月15日発表）参照

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の巡回調査では発生未確認である。

(平年 : 発生面積率4.5%、株当たり虫数0.01頭)

(2) 予察灯調査では、7月第2半旬に県北でわずかな飛来が認められている。

[防除上の注意]

(1) 少ない飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等大きな被害が生じるため、長期残効型の箱施薬を行っている場合でもほ場での発生に注意する。(第1世代成虫における要防除密度は、短翅型雌成虫が株当たり0.2頭)

6 ヒメトビウンカ (縞葉枯病) (やや多)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の発生面積率55.0% (平年31.6%) は平年より多、20回すくい取り虫数1.7頭 (平年1.2頭) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

(1) 本虫は縞葉枯病を媒介し、近年九州管内において、その保毒虫率が高まっている。

7 コブノメイガ (やや少)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の発生面積率2.5% (平年23.9%) は平年よりやや少、被害葉率0.0% (平年0.4%) は平年より少である。

(2) 県内3か所 (都城・えびの・佐土原) のライトトラップ調査では、都城において6月第2~3半旬、佐土原において6月第6半旬に飛来が確認された。また、佐土原に設置したフェロモントラップでは、6月第2~3半旬及び7月第2半旬にまとまった飛来が確認された。

[防除上の注意]

(1) 防除適期は、粒剤を使用する場合は発蛾最盛期、粉剤及び水和剤等を使用する場合は幼虫ふ化期 (発蛾最盛期の7日後) であるので、ほ場での発生状況を把握し適期防除に努める。

野菜類全般

1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

(1) 黄色水盤トラップ (佐土原) による誘殺数は平年並で推移している。

[防除上の注意]

(1) 作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

2 ハスモンヨトウ等のチョウ目 (鱗翅目) 害虫 (並)

平成23年度病害虫防除情報第6号 (6月24日発表) 参照

[予報の根拠]

(1) ハスモンヨトウのフェロモントラップ (国富、都城、西都) での誘殺数は、平年並で推移している。

(2) 西都市におけるタバコガ、オオタバコガのフェロモントラップ調査では、平年並の誘殺数である。

[防除上の注意]

(1) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を徹底する。

果樹全般

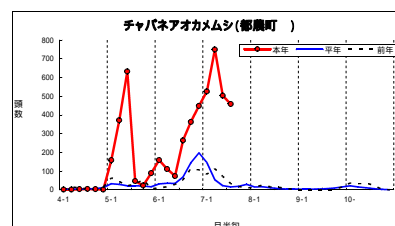
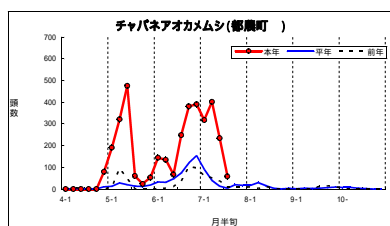
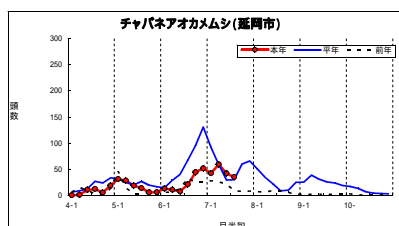
1 果樹カメムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 県内3か所 (延岡、都農、都農) に設置したフェロモントラップ調査では、都農でチャバネアオカメムシの誘殺数が多い。

[防除上の注意]

- (1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- (2) 台風が襲来した場合は、カメムシが餌としているヒノキやスギの毬果が落果し、果樹園に大量飛来するおそれがあるので、注意が必要である。



カンキツ (露地栽培)

1 かいよう病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の春葉調査では、発生面積率16.7% (平年24.8%)、発病葉率1.2% (平年2.4%) はいずれも平年並である。
- (2) 果実調査では、発生面積率22.2% (平年11.6%)、発病果率1.2% (平年0.8%) はいずれも平年よりやや多である。
- (3) 7月20日に台風6号が接近し、強風による枝葉の損傷が懸念される。

[防除上の注意]

- (1) 前述の台風接近の前に、予防散布していないほ場においては、直ちに防除する。
- (2) 発病した枝葉は、伝染源となるので可能な限り取り除き、園外に持ち出し適切に処理する。
- (3) 強風による枝葉の損傷を少なくするため防風垣等を整備する。特に台風の襲来が予想される時は、事前に薬剤散布を行う。
- (4) ミカンハモグリガの被害は、格好の病原菌侵入口となるので、夏秋梢の発生の多いほ場ではハモグリガの防除を徹底する。

2 黒点病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の果実調査では、発生面積率33.3% (平年18.7%)、発病果率9.9% (平年3.8%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 感染源となる枯枝は、可能な限り取り除く。
- (2) 剪定枝をそのままほ場周辺に放置していると激発するおそれがあるので、埋設する等適切に処理する。
- (3) 防除間隔の目安は積算降水量300mmで、降水量が少ない場合でも1か月後には次の防除が必要である。

3 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積率50.0% (平年31.0%) は平年よりやや多、寄生葉率14.6% (平年3.5%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 高温・乾燥状態で生息密度が高まる。
- (2) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5~1頭を目安に防除を行う。

4 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の発生面積率5.6% (平年5.4%)、寄生果率0.1% (平年0.3%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 密度が高くなると防除が困難になるので、1果当たり虫数0.3頭を目安に防除を行う。

(2) 防風垣にイヌマキが植栽されているほ場では、その新芽にも寄生するので防除に努める。

茶

1 炭疽病 (やや多)

平成23年度病害虫防除情報第8号(7月27日発表)参照

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の発生面積率76.5% (平年53.5%)は平年よりやや多、 m^2 当り病葉数12.6葉 (平年4.8葉)は平年より多である。

[防除上の注意]

(1) 新芽の生育期に雨が多いと発生しやすい。防除は秋芽の萌芽～1葉期に予防効果のある剤を散布し、その後、2～3葉期に治療効果のある剤を散布する。

2 輪斑病 (並)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の発生面積率17.6% (平年10.7%)は平年よりやや多、 m^2 当り病葉数0.2葉 (平年0.5葉)は平年並である。

[防除上の注意]

(1) 摘採・整枝直後の傷口から感染するので、作業後なるべく早く防除を行う。

(2) 多発園では新梢枯死症の発生が懸念されるので、秋芽開葉期にも防除を行う。

3 チャノココクモンハマキ (やや多)

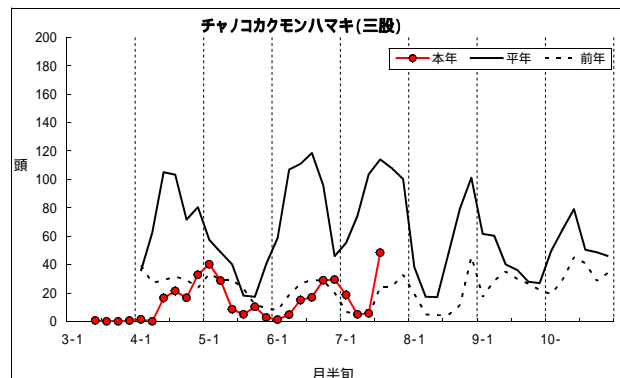
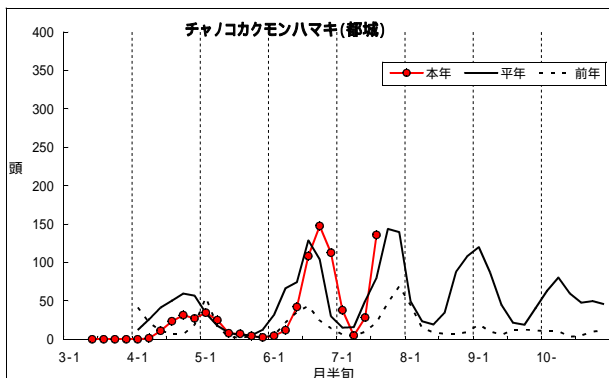
[予報の根拠]

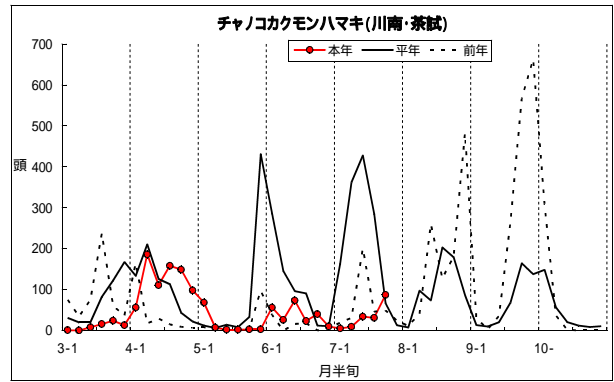
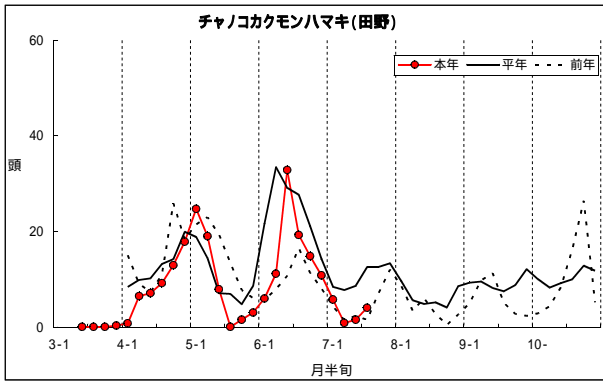
(1) 7月中旬の発生面積11.8% (平年3.4%)、 m^2 当り虫数0.2頭 (平年0.1頭)はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

(1) 県内3か所(都城、三股、田野、川南)に設置しているフェロモントラップ調査では、次回の発蛾最盛期は、7月末～8月始めと予想される。

(2) 発蛾最盛期の7～10日後が防除適期である。





4 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

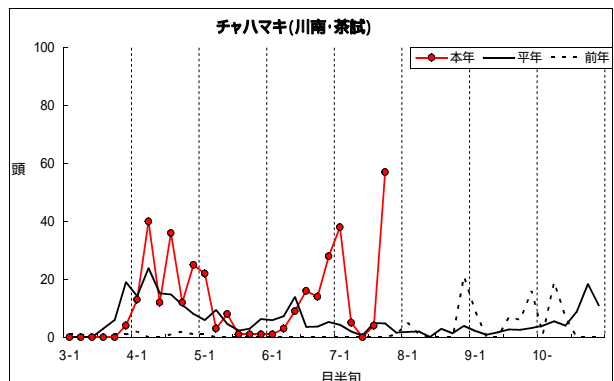
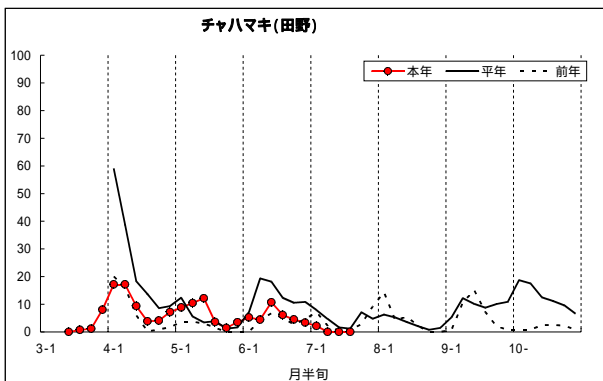
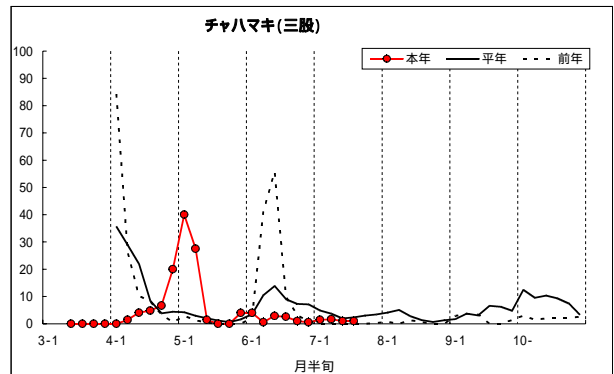
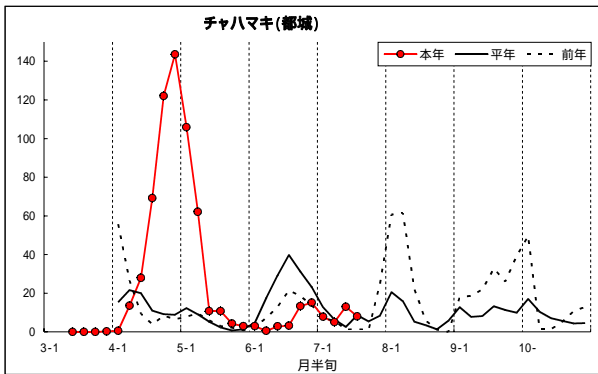
(1) 7月中旬の巡回調査では発生を認めていない。

(平年：発生面積率7.7%、 m^2 当たり虫数0.3頭)

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査では、川南(茶業支場)において7月第1半旬と第5半旬の誘殺数が多く注意が必要である。都城、三股、田野での発蛾最盛期は明確には確認できない。

(2) 発蛾最盛期の7~10日後が防除適期である。



5 チャノホソガ (やや多)

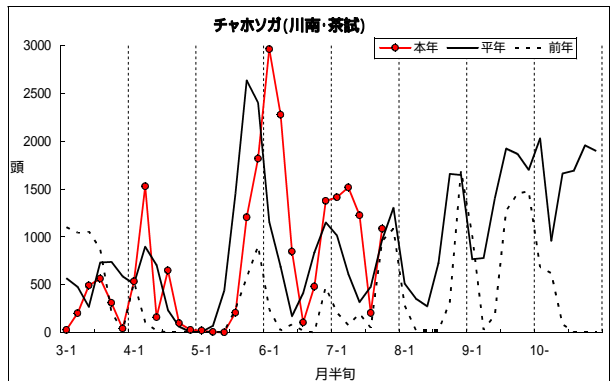
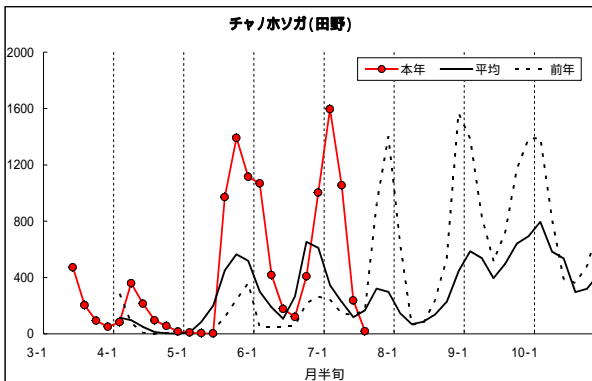
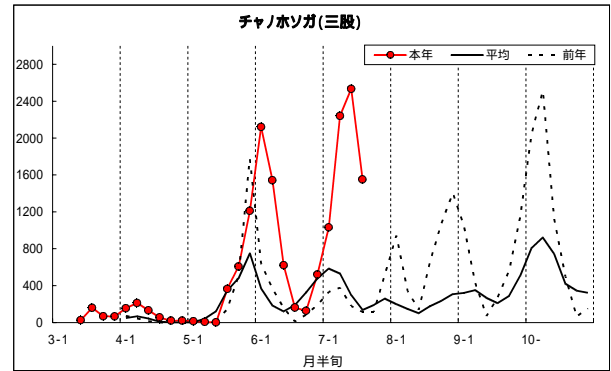
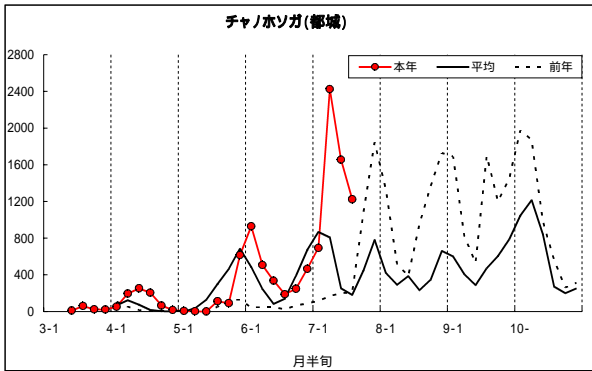
[予報の根拠]

(1) 7月中旬の発生面積35.3% (平年27.6%)は平年よりやや多、 m^2 当たり虫数0.6頭 (平年0.6頭)は平年並である。

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査では、次の発蛾最盛期は8月上旬と考えられる。

(2) 発蛾最盛期の10日後が防除適期である。



6 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積率23.5% (平年15.7%) は平年よりやや多、寄生葉率0.9% (平年1.4%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤の口 - テ - ション散布を実施する。

7 チャノキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の見取り調査による発生面積率70.6% (平年57.7%) は平年よりやや多、寄生葉率7.3% (平年4.4%) は平年より多である。
 (2) 払い落とし調査による発生面積率47.1% (平年52.5%)、払い落とし虫数4.6頭 (平年6.8頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果があがらないので、残効性の長い薬剤が1週間間隔での連続散布を行う。

8 チャノミドリヒメヨコバイ (並)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の見取り調査による発生面積率47.0% (平年46.9%)、寄生葉率4.1% (平年4.7%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) チャノキイロアザミウマとの同時防除とする。

9 クワシロカイガラムシ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の巡回調査では、発生を認めていない。
 (平年：発生面積率16.8%、寄生株率4.0%)

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期の2~3日であるので、ふ化状況をよく観察して防除する。

- (2) 薬剤散布量は、成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布する。

農薬危被害防止運動

6月1日から8月31日は、農薬危被害防止運動月間です。農薬の適正使用により、事故防止に努めましょう。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ <http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
- 3 発生量(程度)の区分
多 い (高 い) やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い (やや高い) 平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない (やや低い) 平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない (低 い) やや少ないの外側10%の度数の入る幅
(平年値は過去10年間の平均)
- 4 予察情報の種類
病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。
 - (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
 - (2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
 - (3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
 - (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
 - (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。ホームページアドレスは<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 生頼
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127
E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp